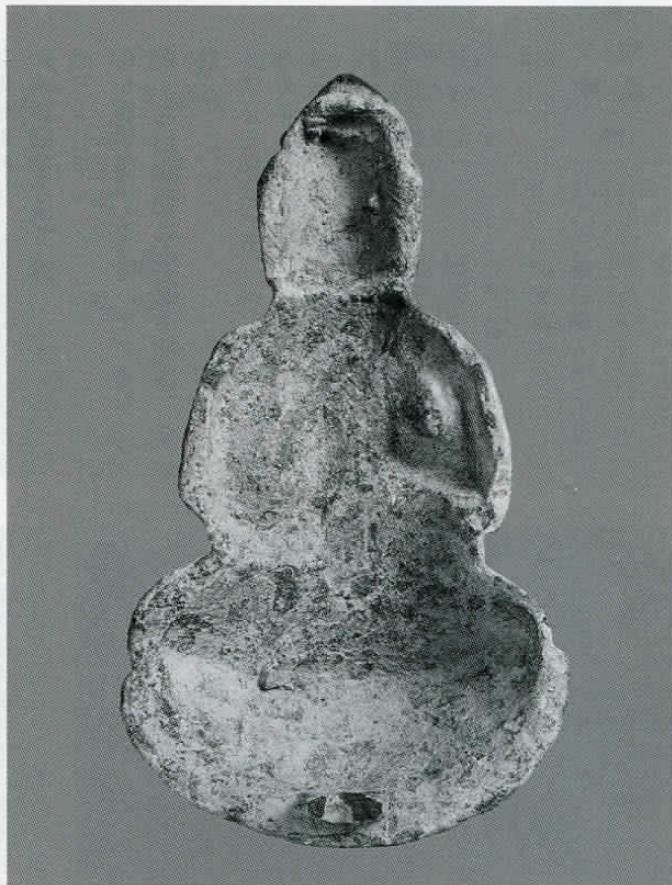


かも 市史だより

令和元年10月
No.40

◆編集発行 加茂市幸町二丁目3番5号 加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎ 0256(52)0080 内線480

■上興屋向 稲荷神社の懸仏 ■



▲ 銅造観音菩薩坐像（渡辺康文氏撮影）

稻荷神社（上興屋向）宮司を勤める金谷家の祭祀場（通称神壇）に、半肉彫で鋳銅製の観音菩薩像が安置されています。背面の頭頂部と台座の下部に留具があり、現状は失われていますが、かつては鏡板に取り付けられた懸仏であつたことがわかります。

観音像は全高八・五cmで、宝髻を結い、両手の肘を曲げ右手は胸前に立て、左手は腹前で未敷蓮華（蓄状の蓮華）を持ち、蓮弁台座に座っています。笑みを浮かべるような切れ長の目、やや大きめの口、豊かな頬など素朴でおおらかな表情をみせてています。像はなで肩で、膝も薄く作っていますが台座は奥行きがあり、線刻で蓮弁のほか蓮肉に沿い蕊を表すなど丁寧で、制作は鎌倉時代に遡ると思われます。

背面全体に土が付着しており、長く土中していたと考えられます。そのため表面には変色がみられます。出土した場所や時期など伝来は詳らかではありませんが、均一に薄く鋳出した造形は厳しく引き締まり、鎌倉時代の優れた工芸技術を伝えていました。

加茂町織物業の盛衰

戦前の加茂町で主要産業だった織物業は景況に左右されることが多い、やがて起こった戦争で決定的な打撃を受けました。ここでは、その経過をたどってみます。

明治～大正期の加茂織物

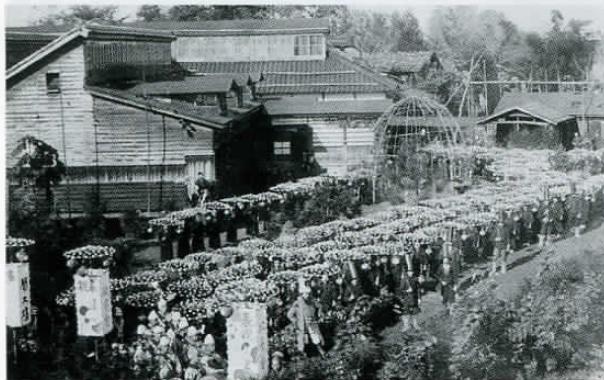
加茂・上条を中心とする加茂川沿岸では、織物業と木工業が栄えました。特に織物工場は昭和四年（一九二九）の製造者（経営者）総数が六五人で、このうち絹織物業者が二十四人、綿織物業者が四一人ありました（三条税務署資料）。

絹織物では織機台数八四台の北辰
舎閑業場(しやせきぎょう)は(関真次郎創業、主產物
越路羽二重・越路紹・各種衿地・帶地・
人絹・撲糸)を筆頭とし、二〇台程
度が中位で、二台という小工場もあ
ります。

産地	生産額(円)
五 泉	7,374,626
見 附	7,253,655
柄 尾	6,942,794
加 茂	4,503,606
十日町	4,083,974
亀 田	1,803,513
長 岡	852,542
小千谷	665,574
小須戸	627,419
越後麻	276,842
村 松	152,581
計	34,330,126

『新潟新聞』昭和 11.2.1 より
作成

外まで広げ、これを契機に綿織物・紡織物とともに機業家が増加します。



▲ 北辰舎関工場（加茂市教育委員会所蔵市川浩一郎文書）

じ皆川商店の第二工場（大字加茂）が圧倒的に大きく、大半は二〇三〇台で、一桁台までありました。

県内の織物産地でも、加茂町の生産額が覇を競う地位にあつたことは、ここに掲げた表によつてみるとができます（別表1）。

加茂町が有数の産地に発展したのは明治時代で、加茂縞（かもじま）などの質の良い木綿織物が多く織られました。明治三十七年（一九〇四）～三十八年の日露戦争頃からは、羽二重を中心とする絹織物も生産を伸ばしまし

月には京都の業者が生糸・綿糸の暴落で原料の供給ができなくなる事態となりました。原料の供給は間もなく復旧しましたが、値段は落ち込み、女工たちも生活難を被りました。

加茂町織物業の景況はこの頃から変化します。一つは、県内はもとより東北地方などにも知られた加茂縞などの需要が減退し、綿織物の生産が落ち込んだこと、もう一つは絹織



物も不振に陥り、本物の絹糸に代わつて代用纖維（せんい）を使つた人絹織物が急増したことでした。

人絹（人造絹糸）は木材パルプのセルロースを纖維にしたもので、フランスでレーヨン糸（長い纖維）、スフ糸（短い纖維）として工業化されました。加茂町では絹織物工場主の服部省三が大正末期に初めて試作し、昭和初年になると絹糸と人絹、あるいは綿糸と人絹を組み合わせた交織織物（こうしきおりもの）として売り上げを伸ばしました。絹織物に似て、しかも安上がりだつたので普及も早く、昭和十年には綿織物を凌駕（りょうえき）して加茂町織物の主役になりました。

不景気と織物業の変化

加茂町織物業の不況を報ずる記事
（『新潟新聞』昭和2・8・13）

加茂絹綿織物

當業者の惡戰苦鬪

不況のドン底にある
加茂絹綿織物
當業者の惡戰苦闘
七月中的生產狀況

加茂町の絹綿織物は、打抜く小況にて、當業者は悪戰苦闘を以て居るが、七月月中における加工費を以て、合計の調査による生産狀況を見るに如何に不景氣が深刻に變ひつゝあるかその慘憺たる様は甚はれる。

先づ
絹綿物においては、前月
本業及び張合のがらも多額の取引
出来し當業者は、盤面をつゝけいづ
れも少額の取交をつゝけたる點にあ
り、先づ度々や落成したる點にあ
り、始終主に生産の獻出と販賣を
たどつたので中旬以後は、既に販賣
はなく始めて貢入する事では、販賣
は無理からず、然るに貢入する事
はなく販賣して貢入する事では、販賣
は不況となり、然る事は、販賣

は、前月
は、前月の就業率の就業率と一般金融
の不景氣で申業の人の多くは、就業せ
ぬ事なるは、さうになく全く就業せ
ぬ自然の就止の動を除くと、當業者は、前月
の後、連々前進せず、不安に陥
はれ、五日と六日になりゆきが、前月終
りまで、一ヶ所勤務の甲様へは、一階原
戒厳しく

製品の
注射網を張り水上

加茂機業界

廢業者が△

四月以來十八件

加茂の機業界は一般經濟界の不振、不況に巻き込まれて廢業者續出の悲運に見舞はれてゐるが右について町役場係員は語る。

最近の加茂町機業界の不振は著しきものがある。不況の現在では廢業者の出る事は止むを得ないが何時も七、八件に止つてゐたものが去る四月以降現在までに届出者の數は十八件と云ふ二倍強に相當する

▲ 昭和恐慌時の記事（『中越タイムス』昭和46.1）

滿州事変後の織物業

これより先、昭和六年九月に満州事変が起り、日本の織維製品は米・英等の植民地宗主国によるブロック経済により締め出されていきました。この困難のさなか、加茂織物同業組合では、組合長皆川正蔵と服部省三を中心に入絹織物の輸出に重点を置き、苦境を開拓しようとしました（加茂織物協同組合「加茂織物の歴史」）。

この年、政府は日本の織維産業等の輸出力を高めるため工業組合法を

表2 加茂の縑・綿織物 昭和7年度生産高

生産種類		生産量(匁)	価格(円)
絹織物	羽二重	6,658,718	319,462
	壁羽二重	9,959,492	511,313
	紺	2,726,996	142,464
	壁紺	9,492,756	546,668
	人絹織物	22,793,069	404,522
	輸出織物	657,103 <small>キル</small>	185,548
木綿織物	正紺・半硫・全硫・夜具縞・紺無地・マンガン白絣・縞縮	386,506 反	367,255
	広幅縞子	24,692 本	405,055
	絹綿交織	121,259 反	215,002
特殊織物のネーム・エンブロイラー			73,000

『新潟新聞』昭和 8.5.11 より作成。記事中に、「前年に比較して絹織物は 2,760,402 円の増、絹綿交織は 66,050 円の増」とある。壁織は、経糸に絹・人絹・緯糸に強い撚りを加えた綿糸などを使って厚みを出した織物

上げをして納品する従来の不便をなくし、町で製品を仕上げ、輸出検査を行うことが可能になりました。主に、業都市への発展を目指したわけです

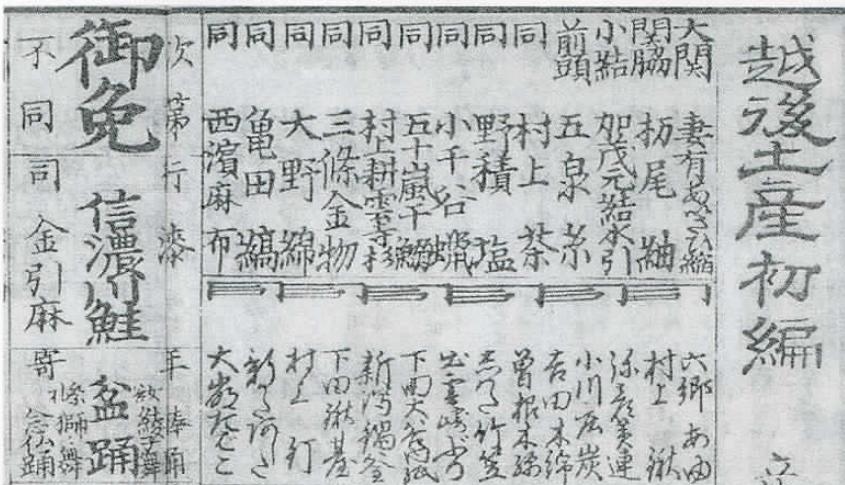
を増加させました。

しかし、それは日中戦争が勃発した翌十三年までしか続かず、その後は戦争の影響で大陸への輸出は激減し、やがて国家総動員法による「ぜいたく品としての織物生産はやめよ」（昭和十五年七月六日、奢侈品等製造販売制限規則）という命令で生産の縮小を余儀なくされます。

戦争末期には軍の強い介入のもと、多くの工場が軍需工場に転用されます。北辰舎関工場は東京から疎開した東京芝浦電気に買収され、皆川工場の跡地には興國綱索が入りました。織物は生活必需品をわずかに残すのみとなり、主要工場は壊滅状態となりました。



▲ 新潟県染織試験場輸出織物検査所加茂支所
(三条市田辺修一郎氏所蔵絵葉書コレクション)



▲ 「越後土産」初編より産物見立取組（部分）元結・水引が載る

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大
産地で、下流にある上条村
や加茂町はその加工品である
水引・元結の生産で知られま
した。

「越後土産」では妻有（十
日町市）と上田（南魚沼市）
縮の両大関、関脇の柄尾（長
野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大
産地で、下流にある上条村
や加茂町はその加工品である
水引・元結の生産で知られま
した。

「越後土産」では妻有（十
日町市）と上田（南魚沼市）
縮の両大関、関脇の柄尾（長
野市）と五泉（五泉市）精

江戸時代の村の主要産業は農業です。しかし、庶民は様々な副業を営み、経験と技術を蓄積し、やがて地域や村の地形・条件を生かした手工業が発達していきました。特産品の誕生です。

元結、和紙、戸障子、瀬戸物、いずれも江戸時代の市域で作られ、越後国内にその名が知られた特産品です。『越後土産』で市域の特産品についてみてみましょう。

江戸時代の特産品

戸数・人口など加茂組の村々の概要を書き上げた寛政五年（一七九三）の明細帳に、村では耕作の合間に男は縄・俵や農具を作り、女は麻・木綿を織っています。これらの

産物は農民の自家用でしたが、商品として販売もされ、広く流通するものも現れました。

元治元年（一八六四）に刊行された『越後土産』は、いわば越後国の便覧（要覧）にあたり、幕末頃の特産品を知るのに便利です。この書籍に、相撲の番付の体裁を取り、「産物見立取組」と題して越後各地の品々を並べており、市域の記事もみえてています。

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

縮の両大関、関脇の柄尾（長

野市）と五泉（五泉市）精

が小結に、
「越後一千枚紙」
が

七谷郷は紙（加茂紙）の大

産地で、下流にあたる上条村

や加茂町はその加工品である

水引・元結の生産で知られま

した。

「越後土産」では妻有（十

日町市）と上田（南魚沼市）

</div